論文審査の結果の要旨

令和５年２月４日

○課程博士 論文博士	臨床教育学	（ふ り が な） 学位請求者氏名	（たにやまゆうこ） 谷山優子

論 文 題 目	特別支援教育の理念を基盤とした生きる力の育成に関する研究

審　　査　　員（３名以上）		
主 査 氏 名　　印	副 査 氏 名　　印	副 査 氏 名　　印
押谷由夫　　印	矢野裕俊　　印	安東由則　　印

論　文　審　査　要　旨

論文の概要

本論文の目的は、特別支援教育を基に生きる力を育成する学校を創っていくための要件を明らかにし、それらが具体的にどう取り組まれ成果を上げていくのかについて解明し、そのプロセスモデルを提案することである。申請者は、学校現場に関わる中で、多様な支援ニーズのある子供たち一人一人が自分らしさを発揮でき、生涯において多様な人と共に生きていく力を育成することが大きな課題であると認識し、本論文を構想した。

本論文の大きな特徴は、5 年間にわたるアクションリサーチを通して、そのプロセスモデルを追究していることである。アクションリサーチにおいては、研究者の立ち位置が課題とされる。本論文では、申請者自身が、学校の依頼を受けて「介入」している。例えば、学校の問題を明確にする調査をおこない、校長と話し合い、取組の計画を立てている。また、校長の意思決定の際に、問題を多方面から提起したり、教員らの実践を助けたり、結果に対して一緒に考え指導の悩みを共感しながら、「改善提案」のサイクルを繰り返すなど、教員と一緒になって取り組み研究実践を深めていった。このことにより、5 年間の学校内部の取組がよりリアルに捉えられている。また、アクションリサーチのエビデンスを確保するために、様々な事実の客観的な記述とそれを基にした教員との意見交換、時々のアンケート調査や聞き取り調査などを繰り返し行っている。そして、総合的な評価を、全教員、学校協議委員会委員、地域住民、保護者、近隣学校の小中学校長らに依頼して行い、学校の変容を確認している。

本論文では、第 2 章において、内外の文献研究を基に、特別支援教育の理念を明確にする。本論文で特に重視している子供たちは、「障害のある子供、安全な成育環境が保障されない子供（ヤングケラーや貧困、虐待など）、不登校、外国にルーツがある子供、LGBT など性的少数者など支援ニーズのある子供）」であるとし、特別支援教育の理念を、このような支援ニーズのある子供たちを根幹に置きながら、一人一人が自分らしさを発揮でき、卒業後も生涯にわたり多様な人と共に生きていく力を培う営みとする。

さらに、これから求められる生きる力を、日本及び世界の動向の分析と教師へのアンケート調査を関連させて考察し、「豊かで責任ある人生につなげ、現在や将来の課題に対応していく力、ウェルビーイングの実現につながる資質・能力」と規定する。そして、本論文が考究する、特別支援教育の理念とこれから求められる生きる力を一体化させた学校を、「主体的に自己の力を可能な限り発揮し、人と関わりながら、よりよく生きていこうとする力を育成する」学校であると明確にしている。

そして、第 3 章において、そのような学校を創っていくための要件を明らかにしようとする。まず、先進的に取組んでいるハワイの中学校を訪問し、国際的に認められている学校の実態を調査することから要件を考究し、日本の先進校の分析を通して比較検討することから、5 つの要件、すなわち「支援ニーズのある子供を根幹に」「すべての子供が安心して過ごせる」「熱意ある研究討議」「探究課題があり自己肯定感を醸成する」「地域の子供理解を促す働きかけ」を導き出している。

さらに、第 4 章では、申請者自身が一定期間「介入」した 3 つの学校の取組について、プロセスを中心に分析することから、先の 5 つの要件を収斂した 4 つの要件、つまり、「特別支援教育に信念を持ちリーダーシップを発揮する校長」「熱意ある研究討議で研鑽する教員」「探究課題で自己肯定

感を醸成する子供」「切れ目なく支援をつなぐ教員集団」を導出している。

それらを踏まえて、第5章では、協力校（A小学校）における5年間のアクションリサーチを行い、プロセスモデルを追究している。A小学校は、通常の学級15学級、特別支援学級2学級である。通常の学級において、発達障害等の支援ニーズのある児童の在籍割合が他校より多い。本論文では、明らかにした4つの要件を中心に、A小学校の取組と変容のダイナミズムとプロセスを、4つの要件を中心に、0期、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期に分けて追っている。

0期は、申請者の介入前の1年間で、この学校の課題が何であるかを掘り起こした時期として設定している。Ⅰ期では、「授業改善」が喫緊の課題であると捉え、重点的に取り組んでいる。結果的にⅢ期の最後まで教員らは子供に合った学びや特別支援学級との交流学習に取り組み続け、教員としての資質向上を図っていったことを明らかにしている。Ⅱ期は、「課題探究」と「家庭・地域への働きかけ」に重点を置いて取り組んでいる。「探究課題」は、市から委託されたものであるが、終了後も継続して取り組んでいる。「家庭・地域」への働きかけはⅢ期で、より強くなっていく。Ⅲ期は、「支援ニーズのある子供一人一人への生きる力の育成」に重点を置き、地域へ支援をつないでいった。

このことを、さらに、4つの要件から分析することで、「特別支援教育を基に生きる力を育成する学校を創るプロセス」を、次のようにまとめている。まず、特別支援教育を信念とする校長がリーダーシップを発揮することが土台となる(0 期)。校長から特別支援教育を基にしてすべての子供に生きる力を育成するという基盤となる方針を示された教員らが、特別支援教育の考え方を共有し、一人一人の子供に合った授業を工夫し研鑽する（Ⅰ期)。子供は探究課題を持ち、共に学び合いながら自己肯定感を醸成していく（Ⅱ期)。このような取り組みのダイナミズムから、家庭や地域、関係機関と連携し協働しながら、切れ目ない支援をつないでいこうとする教員集団が生まれる（Ⅲ期)」ことを明らかにしている。

審査結果

本論文は、特別支援教育を一人一人の子供の学びを保障する全ての子供に資する教育であることを押さえたうえで、特別支援教育の理念に基づき、一人一人が自分らしさを発揮でき、生涯において多様な人と共に生きていく力を育成する学校を創るためのプロセスモデルを提案しようとするものである。本論文の内容について、慎重に審議された結果、特に次の点が評価された。

第1は、これから求められる学校教育のあり方を、特別支援教育の理念を基盤にした生きる力の育成と捉え、具体的な課題をグローバルな視点と現実の臨床の場の視点から理論的・実証的に考究していることである。特別支援教育の理念をすべての学校において取り組むと提案されているが、そのことを、多様な支援ニーズのある子供たちにどのような力を身につけていけばよいのかといった根幹にかかわる課題を、日本及び世界の動向の分析と教師へのアンケート調査とを絡ませて明らかにしている。

第2は、そのような学校をつくる要件を、多様な方法で明らかにしていることである。国際的に評価されているハワイの学校において追究し、日本の先進校の分析を通して比較検討することから、5 つの要件を見出し、さらに、申請者自身が一定期間関わった学校の取組を分析することから、プロセスから見た要件を先の5つの要件を収斂する形で4つにまとめている。臨床研究を行う上において、どのような視点から取り組んだり分析したりするかを明らかにすることは大きな課題である。本論文において追究した方法は、この面においても評価される。

第3は、5年間にわたるアクションリサーチを行うことから、プロセスモデルを提案していることである。申請者が行ったアクションリサーチは、対象校に入り込み、一体となって取り組む方法がとられている。そのことによって、学校内部の取組がよりリアルに捉えられている。また、エビデンスを確保するために、様々な資料やデータが収集され、その分析も教員たちと一緒に行っている。そのことを根拠としながら、取組や変容のダイナミズムとプロセスを明らかにし、プロセスモデルを提案していており、本論文のオリジナリティが認められる。そのことはまた、本論文の社会的還元性と社会的意義の高さを示していると評価できる。

最終試験（公聴会）の質疑応答内容を含めて、本論文は、博士課程の要件として便覧に示されている「問題、方法、討論、社会への還元性に関する理論的整合性、論文の独自性など」の観点から、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士後期課程における学位論文として十分合格ラインを超えていることを承認し、投票の結果、博士学位（臨床教育学）授与について「合」と判定された。